

URP to Publish the International Journal CITY, CULTURE & SOCIETY from Elsevier
国際学術誌『CITY, CULTURE & SOCIETY』(CCS)をElsevier社から刊行

2010年より大阪市立大学都市研究プラザが編集責任を持ち、Science DirectやScopus、LexisNexisなどの学術データベースを擁し学術出版の世界でのトップ企業であるエルゼビア社（オランダに本社、1880年設立、ルーツはElsevier出版で創業429周年）から、『CITY, CULTURE & SOCIETY』（CCS）が発行されることになりました（当座は季刊）。これは大学の機関がクレジットされるジャーナル出版としてはアジアで初めてともいえるものであり、内容は以下のとおりです。

■出版の趣旨・目的

21世紀は、「都市の世紀」と呼ばれ、持続可能な都市、コンパクト・シティ、ポストモダン・シティ、メガシティなど、様々なコンセプトが生まれている。CCSは、文化創造と社会的包摂を旗印とし、都市のガバナンスとマネジメントを中心に扱う学術ジャーナルである。本誌の主な目的は、都市に関する先駆的な研究を推進し、われわれが抱える課題に対応する新たな都市づくりのためのビジョンおよび権限を有する都市行政を推進することにある。

また、CCSは、様々な観点を取り入れた新たな学際的パラダイムを促進し、21世紀を特徴づける都市が抱える課題に、このパラダイムを適用していくことを目指す。とりわけ重要なトピックとして、都市経済、文化創造、社会包摂、社会的持続可能性、文化テクノロジー、都市マネジメント、持続可能な都市、創造都市などが挙げられる。CCSは、ピア・レビュー（専門家による評価）の対象となる国際学術誌として、経済学、経営諸科学（経営・商学・会計）、プランニング、政治学、統計学、地理学、社会学、文化学、人口学、行政学を含む様々な専門分野からの寄稿も歓迎する。

■契約条項

エルゼビア社との契約は2010年から5年間であるが、3年を経過したところで、組織体制の見直しを行う。その際に、ターゲットとなるのが、次の3点の目標である。いずれもトムソン社の社会科学引用インデックス(SSCI)に掲載される条件に合せたものであり、トップジャーナルとして世界に認知されるための必達条件である（2012年12月末時点）。

1. 投稿論文数200
2. 電子ジャーナルデータベースScience Directから5万件のダウンロード（1年間）
3. 被引用率（インパクトファクター）0.5

■発行体制

Editor-in-Chief: 佐々木雅幸教授（都市研究プラザ所長
・創造都市研究科）

Managing Editor: 岡野 浩教授（都市研究プラザ副所長
・経営学研究科）

■編集体制

全体統括は大阪の都市研究プラザ内に置かれる。エルゼビア社の編集の中心はオックスフォード市にあり、関連研究者もオックスフォード大学・オックスフォードブルックス大学などに多いことから、オックスフォード大学と契約し、経営大学院に海外編集オフィスを置く。さらに多くの都市研究者を擁するLSE（ロンドン大）をはじめ、メルボルンやミュンヘン大学などにも特別号の編集機能を持たせる。北・南米についてはLAのサブセンターおよびミシガン大学（アナーバー）、HECモントリオールなど、特色ある研究者をもつ大学を拠点とする。アジアは我々の最もネットワークの層が厚いエリアであり、香港・ソウル・上海・バンコク・ジョグジャカルタなどにも特別号の編集機能を持たせる。

■発刊開始：2010年3月

■特集号のテーマ（予定）

1. Re-thinking Creative Cities
2. Impact of Future Technologies on Civilization and Urbanization
3. Creating Cities: Culture, Space and Sustainability
4. Social Inclusion & Culture
5. Poverty, City & Housing
6. Arts & Society

AIMS and SCOPE

The 21st century has been dubbed the century of cities – sustainable cities, compact cities, post-modern cities, mega-cities, and more. CCS focuses on urban governance, under the banner of cultural creativity and social inclusion. Its primary goal is to promote pioneering research on cities and to foster the sort of urban administration that has the vision and authority to reinvent cities adapted to the challenges of this century. The journal aims to stimulate a new interdisciplinary paradigm that embraces multiple perspectives and applies this paradigm to the urban imperative that defines the 21st century.

Topics of special interest to CCS include urban economics, cultural creation, social inclusion, social sustainability, cultural technology, urban governance, sustainable cities, creative cities. As a peer-reviewed international journal, CCS welcomes contributions from disciplines including but not limited to economics, business, planning, political science, statistics, geography, sociology, cultural studies, population studies and public administration.

Planned Issued: March, 2010 (4 issues per year)

Editors : Editor-in-Chief: Professor Masayuki Sasaki, Director; URP, Graduate School for Creative Cities

Managing Editor: Professor Hiroshi Okano, URP, Vice-Director, Graduate School of Business

SPECIAL 1 The Opening Symposium of Melbourne URP Sub-Center

特集1 メルボルンサブセンター開設記念シンポジウム

2009年2月2日～4日にかけて、オーストラリア・ヴィクトリア州のメルボルン大学にて、メルボルンサブセンター開設記念シンポジウムと関連ワークショップが開催されました。都市研究プラザからは、佐々木所長、岡野運営委員、水内副所長をはじめ、中川、矢作、宮本のほか、グローバルCOE特別研究員の柴田、諏訪、北川、福本、事務スタッフの近藤が参加しました。海外サブセンターの開設は上海、バンコク、ジョグジャカルタ、ロサンゼルス、香港に続き6か所目になります。

メルボルン市は、ユネスコによる「創造都市」の認定を受けるなど、都市研究プラザの諸プロジェクトの進展にとってこの上ない場所といえます。またメルボルン大学は、多くのコミュニティ・カレッジの創設など、市民知と学知の融合に関する先進的な取り組みを進めており、目指す新たな都市像の点で当プラザと多くを共有しています。

さらに、英語圏のサブセンターとして、2010年初頭にオランダ・エルゼビア社より発刊予定の『CITY, CULTURE & SOCIETY』の編集拠点



機能を担うことも期待されています。

メルボルンサブセンターは、2009年春竣工予定の商経学部の新しいビルの10階に設けられる予定です。

サブセンター入居予定のメルボルン大商経学部棟

■サブセンター開設セレモニー

メルボルン大学のユニバーシティ・ハウスにて、シンポジウムに先立ってサブセンター開設セレモニーがもたれ、佐々木所長より、サブセンター開設にご尽力いただいた同大商経学部のダニー・サムソン教授への謝意のあと、開設に際してのスピーチが行われました。



サブセンター開設セレモニーが開かれたユニバーシティ・ハウス

スピーチでは、都市研究プラザが推し進めている都市ガバナンス・文化創造・社会包摂を通じた新たな都市像の再構築にとって、メルボルン大学をはじめとする関係各所との協働作業が極めて意義深いものになることが示されました。先に述べましたように、メルボルン大学は地域のさまざまな現場に深く切り込み、多文化社会という背景の下での社会包摂やコミュニティ創成を市民と共に進めています。こうしたコミュニティに根ざした新しくかつ実践的な知の創造は、まさに



公式ランチミーティング

当プラザが目標とするところでもあり、その意味でメルボルンはサブセンター開設にうってつけの土地といえるでしょう。さらに佐々木所長からは、サブセンターを拠点に、都市研究プラザとメルボルン大学との間で「協働作業の新たなモード(new mode of collaboration)」を実践していくという野心的な目標も述べられました。

■開設記念シンポジウム

(2月2日, 於メルボルン大学)

#プログラム

- *Toshio Mizuuchi (URP): Moderator of roundtable on social inclusion in Osaka and Melbourne
- *Hiroshi Okano (経営学研究科, URP): The possibility of new international journal on urban research
- *Hiroshi Yahagi (創造都市研究科, URP): Shrinking cities and social Inclusion: Nagasaki's Challenges
- *Katsuhiro Miyamoto (工学研究科, URP): Recent architectural works including Sugimoto-cho Station Project in Osaka
- *Kuniko Shibata (URP研究員, London School of Economics): Neoliberalism, risk, and spatial governance in the developmental state: Japanese planning in the global economy
- *Kevin O'Corrnor (UM): Logistics as a Creative Activity
- *Darko Radovic (UM): The world city hypothesis revisited - the concept of eco-urbanity
- *Shinya Kitagawa (URP研究員): An impossible "offshore" camp for immigrants at Lampedusa in Italy - a limit to include socially undocumented immigrants
- *Danny Samson and S Goldsmith (UM): Sustainable development and business success

ランチミーティングに引き続き開催されたシンポジウムでは、都市研究プラザとメルボルン大学双方の研究者により、昨今の都市における社会包摂・文化創造に向けた理念的・実践的な課題のほか、新たな都市研究を創生する基盤づくりに関する発表が行われ、日豪双方の参加者から多くのコメントが出されました。

「創造都市」「世界都市」「コンパクトシティ」など多様に形容される現代都市にあって、いずれの発表も、地域における住民主体の活動を見据えながら、新たな都市像を構築する具体的なステップを明確に意図するものでした。サムソン教授は、こうした研究が分野横断的に行われる必要性を強調されていましたが、発表の内容は建築からグローバルな経済体制まで多岐にわたる刺激的なもので、早くもメルボルン大学とのパートナーシップの意義が垣間見えたといえるでしょう。

■ワークショップ

(2月2～3日、於ヴィクトリア大学)

#プログラム

2月2日

*Worksheet 1(18:30～19:45) *Worksheet 2(20:00～23:00)

2月3日

*Worksheet 3(8:30～9:30) *Worksheet 4(9:35～11:30)

*Worksheet 5(12:30～14:00) *Group reports on social inclusion (14:15～15:30) *Final discussions, where to from here?(15:40～16:30)

遅い時間からのスタートでしたが、サマータイムのメルボルンでは夕方のような感覚です。

場所をヴィクトリア大学に移し、社会包摂に関するワークショップが開催されました。同大学と、社会包摂の面で先進的なコミュニティ活動を行っているウエスト・メルボルン地区(Western Region)のソーシャルワーカーや地方議会議員の方などが参加しました。

ワークショップは、参加者が四つのグループにわかれて討議をする形式で行われ、各セッションごとに意見を集約し、グループごとに発表を行います。

発表の内容は壁に張り出され、セッションの合間に各人が見ながら、次の議論へと移っていきます。参加者のみなさんはわれわれの事前の知識がなかったことを差し引いても驚くほど積極的に発言され、社会包摂の定義にはじまり、どのような状態を包摂の達成とするかなど、四者四様の結論が出されました。大学の側から一つのありうるべき姿を押し付けるのではなく、地域における多声的な実情に鑑みながら現場と大学が「社会包摂」という目標に向かって協働するという、まさに都市研究プラザの目指す「融合」が起こったワークショップでした。

また、締めくくりにあたって、水内から大阪を中心とする日本の社会排除の現状と包摂の取り組みが、中川からバンコクやジョグジャカルタでのアート・マネジメントを通じた文化創造と社会包摂の実践が紹介されました。ウエスト・メルボルン地区の関係者からも、大きな関心が示されました。

また当初予定されていなかったミニスタディツアーも急遽お願いし、3日の昼食時に中川、水内、諏訪が参加しました。コミュニティアートセンター、コミュニティセンター、デイセンターとウエスト・メルボルン地区のさまざまなコミュニティベースな施設とその活動を垣間見ることができました。日本の公民館活動のごぼこやある種の形骸化されがちなルーチンワークの蓄積から見ると、そのスタンダードの充実度はやはり学ぶべきものがあるように思われました。



2日目の現地市民とのワークショップ

■メルボルンサブセンターの今後

国際学術誌'*CITY, CULTURE & SOCIETY*'の編集や、メルボルン大学との諸プロジェクトでの連携の面で機能するわけですが、今回ウエスト・メルボルン地区の関係者と知己を得たこともあり、同地における社会包摂の実践と研究へのフィードバックという活動の拠点にもなることが期待されます。さらに、開設後は、グローバルCOE関係者の派遣も検討されています。

From February 2nd thru 4th, at the University of Melbourne in Australia's Victoria State, a commemorative symposium and related workshops were held to mark the opening of the Melbourne Subcenter. It became the sixth overseas subcenter to be opened, following Shanghai, Bangkok, Yogyakarta, Los Angeles, and Hong Kong. The city of Melbourne is an ideal location for advancing the various projects of the Urban Research Plaza, having received recognition by UNESCO as a 'creative city.' The University of Melbourne also has established many community colleges, has moved forward in progressive involvements in blending the know-how of the citizens with academic knowledge, and shares much in common with the URP in the vision of the city that it is aiming towards. Additionally, as a subcenter in the English-speaking world, it is expected to fill the role of editorial base for *CITY, CULTURE & SOCIETY*, scheduled for publication in early 2010 by Holland Elsevier, Ltd.

At the lunch meeting that kicked off the symposium, URP Director Sasaki gave a speech marking the opening. He indicated that the cooperative projects undertaken with the University of Melbourne and the other related institutions were deeply significant for the reconstruction of the face of the city through the urban governance, cultural creativity, and social inclusion which the URP is promoting. Director Sasaki further related his ambitious goal of putting into practice a new mode of collaboration between the University of Melbourne and the URP based on the subcenter.

At the symposium, researchers from both the University of Melbourne and the URP made presentations on a range of conceptual and practical issues from this past year on social inclusion and cultural creativity in the city, and on building a basis for creating a new type of urban studies. There were many comments from the participants, both Japanese and Australian. In all the various forms that contemporary cities take, such as 'creative cities', 'world cities', 'compact cities', etc. each of the presentations focused on the activities of local bodies of residents and clearly projected detailed steps for building the new vision of the city. In the workshop on social inclusion held at the University of Victoria, participants included social workers from Melbourne's Western Region who are engaged in progressive activities related to social inclusion, and local assembly legislators.

In as much as this was a collaboration between the university and people on the ground, taking into account varied voices on the actual local conditions, and not something stamped out as a single model of what 'should be' by the university, we feel it was precisely a workshop where the 'fusion' aimed at by the URP occurred.

SPECIAL 2 The 7th Academic Forum in Yogyakarta / Bangkok 特集2 ジョグジャカルタ／バンコク第7回アカデミックフォーラム

■ジョグジャカルタ・アカデミックフォーラム

2009年2月6日(金)、インドネシア共和国ジョグジャカルタ市に位置するガジャマダ大学(Universitas Gadjah Mada)で、第7回ジョグジャカルタ・アカデミックフォーラムが開催されました。このフォーラムは、大阪市立大学都市研究プラザ及び文学研究科都市文化研究センター、ガジャマダ大学、インドネシア国立芸術大学、という3大学が共同で実施したものであり、URPジョグジャカルタ・サブセンターの主要事業のひとつです。会場は、ガジャマダ大学本部棟のマルチメディア室で、使用言語は英語でした。発表者は、ガジャマダ大学から2名、インドネシア国立芸術大学から2名、大阪市立大学からは、中川眞(文学研究科教授)・水内俊雄(都市研究プラザ教授)・諏訪晃一(都市研究プラザ博士研究員)の3名の合計7名で、参加者は約70名でした。

ガジャマダ大学は1949年に設立された、インドネシアでも最も古い国立総合大学のひとつで、18の学部で55,000人の学生が学ぶ大きな大学です。古都ジョグジャカルタは、120もの高等教育機関が集まる「大学の街」でもあり、ガジャマダ大学はその中心的存在です。また、インドネシア国立芸術大学は、インドネシア(特にジャワ島)の文化芸術の一大拠点であるジョグジャカルタに本拠を置く国立の芸術大学として、確固たる地位を築いています。



大阪市立大学は、文学研究科が2002年にガジャマダ大学文化科学部・インドネシア国立芸術大学大学院と交流協定を結んで以来、両大学と学術交流を続けてきました。その中核事業のひとつとして位置づけられてきたのが、2003年から継続的に開催されてきた、ジョグジャカルタ・アカデミックフォーラムです。当初は、大阪市立大学文学研究科が21世紀COEプログラムに採択されたことに伴って設置された、都市文化研究センター(UCRC)が中心となって開催されてきましたが、6回目以降は、都市研究プラザ(URP)を中心に展開されている、グローバルCOEプログラムの活動の一環として実施されてきました。会場の手配や資料の準備などの開催の実務は、2003年以来、UCRCジョグジャカルタ・サブセンターの現地スタッフが担当しています。過去の開催状況は、サブセンターのホームページでご覧いただけます。

(<http://www.ucrc-yogya.or.id/>)

今回のフォーラムでは、Socio-cultural Networking をテーマとして採り上げました。5,000名を越える人々が亡くなったジャワ島中部地震(2006年5月)で、ジョグジャカルタは大きな被害を受けました。災害に代表される非常時には、被災地内外でのネットワークが必要です。しかし、非常時のネットワークは、平常時のネットワークがその背景になれば、十分な力を発揮することができません。平常時のネットワークが災害をはじめとする非常時にも機能し、非常時の活動を通じて、平常時のネットワークもさらに強化されるといふ、循環的なネットワークの変遷について検討することを目指しました。実際、ジョグジャカルタでは、震災時に構築された有形無形のネットワークが、災害後の社会においても存在意義を見だし、活動を続けています。フォーラムの中では、ジャワ島中部地震からの復興における文化芸術の役割や、阪神・淡路大震災の救援・復興の過程で構築されたネットワークなどを巡って、議論が展開されました。

加えて、フォーラムの翌日には、ガジャマダ大学のDr.Timbul Haryono副学長、インドネシア国立芸術大学のHerminen Kusmayati副学長、ガジャマダ大学文化科学部のIda Rochani Adi学部長と、本学の水内教授・中川教授との間で会談が行われました。国際学術誌刊行についての協力や、今後の研究交流の内容などについて協議し、全面的な支持を得ました。都市研究プラザとしては、2002年以来、継続的に展開されてきた両大学と本学の交流を、さらに発展させることを目指しています。



On Friday, February 6, 2009 the 7th Yogyakarta Academic Forum was held at Gadjah Mada University located in Yogyakarta in the Republic of Indonesia. Presentations were made by two researchers from Gadjah Mada University, two from the Indonesia Institute of the Arts, and three from Osaka City University. There were about 70 total attendees. This forum has been held each year since 2003, and the theme of this year's forum was 'Socio-cultural Networking.'

■バンコク・アカデミックフォーラム

2009年2月16日(月)9:00~16:00に、タイ・バンコク市内のチュラロンコーン大学において、都市研究プラザおよびチュラロンコーン大学芸術学部の共催で、The 7th Academic Forum in Bangkok: Urban Culture as Social Interface(第7回バンコク学術公開研究会「社会的接点としての都市文化」)が開催されました。

この「バンコク学術公開討論会」も、6年前から開催されており、日本とタイ、ときにはインドネシアも加えて人的交流の深化に貢献してきました。都市研究プラザからの報告者3名にとって、タイでの学術発表は初めてであり、今回もタイの研究者との活発な意見交換を通じて新たな交流が生まれました。また、得難い海外発表の経験も積めるなど、都市研究プラザの使命の1つでもある、若手研究者養成の観点からも、意義深い研究会であったといえます。

都市研究プラザからの参加者は、中川眞(文学研究科教授)、半澤誠司(GCOE研究員)、石川優(文学研究科院生、プラザRA)、川口夏希(文学研究科院生、プラザRA)です。他に大阪市立大学関係者として、山野正彦(文学研究科教授)と山崎雅人(文学研究科准教授)、藤岡資正(GCOE研究員)が参加しました。中川は共同司会を、半澤、石川、川口の3名は報告を、山野は閉会の辞を務めました。

ブッサコーン氏(チュラロンコーン大学准教授)による開会宣言の後、中川より、本討論会の副題である「社会的接点としての都市文化」について、都市文化を基盤にした社会の様々な要素同士の繋がりについて指摘がなされました。



報告者は全7名で、1人目の半澤は、「文化産業の中心地としての東京—都市資源から生じる競争力」との題名で、日本のアニメーション産業とゲーム産業が東京の都市資源を自らの競争力に取り込んでいると論じました。2人目のカンティーンウォン氏(チェンマイ大学講師)による「チェンマイ郡におけるラナ伝統音楽の背景再考」では、タイの少数民族の伝統音楽が、現代音楽からも影響を受けて変化していると指摘しました。3人目の石川は、「やおいマンガ論—日本における二次創作」との題名で、日本の同人誌界の隆盛と、その中でも一大ジャンルとなっている「やおい」を紹介し、その特性を論じました。

昼食を挟んで4人目のスマンチャット氏(ウボン・ラチャタニー大学講師)は、「楽園の鳥—現代の翼ファッションに通じる神話の『キンナリー』」との題名で、翼から着想を得て新たな生地装飾を産み出すまでの過程が述べられました。5人目の川口は、「日本のストリートファッションはどのように形成されたか—大阪市堀江の事例」と

の題名で、大阪市堀江がストリートファッションの流行の発信地として形成されていく過程を明らかにしました。6人目のクランチェン氏(舞踊家)は「ラコン・ロン・レクター小劇場」との題名で、小劇場で観客と芸術家が近い距離で相互に影響しあう重要性を述べました。7人目の岩澤氏(国立民族学博物館研究員)は、「現代タイにおけるコミュニティ芸術運動」との題名で、タイにおける実演芸術教育の現状と、タイの地方などでコミュニティと実演芸術の協力関係が紹介されました。最後に山野が閉会の辞を述べて、研究会を締めくくりました。

本研究集会のタイ側報告者3名のうち2名は、自ら芸術活動を実践する方々でもあり、実践家と観察者の側面がある研究者との対話が行われた場でもありました。普段の関心が必ずしもまったく共通ではない多様な背景の報告者と参加者が集まりましたが、会場では活発な議論が交わされました。日本やタイという国レベルに限らない、お互いの「異文化」への関心が、本研究集会を活気あるものにしていました。

今後とも、本研究集会は定期的開催していく予定です。チュラロンコーン大学に設置されている都市研究プラザのバンコクサブセンターのさらなる活用も含め、日本とタイの研究交流が一層盛んになることが期待されます。



On Monday, February 16, 2009, The 7th Academic Forum in Bangkok: 'Urban Culture as Social Interface' was held in Thailand, jointly sponsored by Osaka City University's URP and Chulalongkorn University's Performing Arts Department. Seven people from Osaka City University participated, serving as moderators and presenters. The seven presented a variety of reports about culture and there was lively discussion. This research gathering has been held regularly in the past and plans are to continue it. It is expected to help develop human interactions between Japan and Thailand in the future.

Unit Reports

ユニットレポート

The 1st Unit
第1ユニットUrban Theory
都市論

■上海・大阪クリエイティブミーティング

日時：2009年2月24日（火）～27日（金）

訪問先：上海市内のクリエイティブ拠点など

主催：上海・大阪クリエイティブミーティング実行委員会（大阪市、大阪市立大学）

大阪市経済局と都市研究プラザの共催によるこの事業では、創造（創意）都市としての発展めざましい上海の状況を視察するとともに、創造産業における今後の交流チャンネルを開くことをめざし、大阪で活動するクリエイターと都市研究プラザのメンバーが参加しました。なお、この事務局を扇町プラザが務めました。

「上海・大阪クリエイティブミーティング」Part1

会場：上海社会科学学院

Part1では、創造都市研究からみた中国と日本の創造都市としての特性について議論を交わしました。上海社会科学学院は上海市の政策設計と研究を主たる目的とする上海市のシンクタンクです。

当プラザからは、所長・佐々木雅幸による、日本の創造都市と大阪についての報告と、特任講師・杉浦幹男による、日本におけるコンテンツ産業のポテンシャルについての発表を行いました。

上海社会科学学院からは、文化産業研究センターの主任・花建教授から、国際都市上海のクリエイティブ産業戦略についての報告と、同文学研究所の副研究員の劉軾氏から今後のクリエイティブ産業発展の可能性についての報告がありました。

「上海・大阪クリエイティブミーティング」Part2

会場：上海証大現代美術館レクチャールーム

NPOクリエイティブクラスター理事長の岡田智博氏のモデレーティングで、上海と大阪の相互からのプレゼンテーションが行われました。

まず大阪市の取り組みとして、大阪市経済局産業振興部 新産業支援担当課長 川瀬哲也氏から「次代の大阪経済を牽引する新産業の育成」についての説明、そして、扇町インキュベーションプラザ（メビック扇町）所長 堂野智史氏からクリエイティブ・クラスター事業についての報告が行われました。

次に上海の事例として、上海証大文化発展有限公司 常務副総裁 王純杰氏が、文化芸術を用いた産業開発の取り組みについて、上海証大美術館 副館長 周強氏からこの美術館の運営手法についての説明がありました。

続いて、大阪で活動するクリエイターによるプレゼンテーションが行われました。（株）REGの池田樂水氏と キネトスコープ社の廣瀬圭治氏から、両社の連携によるイベントプロデュースの紹介、（有）デコラティブモードナンバーズリーの服部滋樹氏から、異業種のクリエイターによるユニットgrafとその活動拠点についての説明、そして、（株）アイソレーションユニットの柳原照弘氏から、プロダクトから空間まで多岐にわたる自身の活動についての紹介がなされました。

視察：上海城市彫塑現代芸術中心 紅坊

市の中心部に位置する、鉄鋼工場跡を活用したアートと創意産業

の集積地を訪問しました。工場をそのまま活用した展示スペースでは、彫刻を中心とする展覧会などが実施され、また、他のブロックは外観を可能な限り保存した上で空間が効率よく改修され、アート系のギャラリー、アーティストのアトリエ、デザイン事務所や広告代理店など、多様な業種のテナントが入居していました。中心部の屋外広場には上海市所有の彫刻が多数設置され、周囲にはデザイン図書館やカフェが点在し、一般にもオープンなスペースとなっており、異業種間の交流の場ともなっていました。

表敬訪問：上海市対外文化交流協会

中国の文化を世界に紹介し、また世界の文化を吸収し、文化の平和的発展に寄与することを目的とするこの協会は、日本とは設立時より広い人脈を持ち、交流も多いなどの説明を、上海市対外文化交流協会の副秘書長の鄭宏根氏、日本担当の王晨氏から聞きました。その後、大阪から参加したクリエイターより、中国でのデザイナーの存在、交流、場づくりなどについての質問など、活発な意見交換がなされ、最後に、文化産業を通じた交流をスタートしていくことが確認されました。

視察：上海創意産業中心（SCIC）、田子坊エリア

上海創意産業中心の常務副秘書長の藩瑾氏のご案内で訪問したSCICでは、現在の上海のクリエイティブ産業の現状とSCICの活動について、所長の何増強氏から紹介されました。

2007年に政府によって設置されたクリエイティブ産業集積拠点であるSCICの役割は、クリエイティブ産業のプラットフォームを構築し、マーケティング活動の支援をすると同時に、産業として育成することだとのこと。その集大成といえる活動「イベント・ウィーク」事業には、毎年20～30カ国が参加しているそうです。

その後、上海のソーホーと呼ばれている田子坊を訪れました。1950年代の町工場跡地の倉庫や租界時代の集合住宅を再利用した、アートやファッション関連のショップ、カフェなどが細い路地に犄めき合っており、地元の人々と観光客が行き交う賑やかな一角でした。

■四天王寺と都市大坂研究会 第12回

日時：2009年1月23日（金） 19:00～21:00

発表者：片山早紀氏（大阪大学大学院）

「近世大坂における都市支配と寺院」

江戸時代の大坂は四百程の寺院が立地した非常に寺の多い都市であり、特に秀吉の時代から徐々に形成されていった寺町は現在もなお当時の景観の面影を残す場所として知られています。本報告ではこれら大坂の寺院について、未だ明らかになっていない部分が多い都市構成員としての実態を考察しました。市政を担った大坂町奉行所は大坂の寺院や寺町をどのように把握し、支配構造の中に組み込んでいったのか。都市特有の寺院の存在形態や役割について探りました。

■近世大坂研究会

日時：2009年2月22日（日）13:00～17:00

場所：大阪市立大学文学部棟1階 文学部会議室

共催：近世大坂研究会・G-COE都市論ユニット・都市文化研究センター（重点研究）

発表者：塚田 孝(文学研究科教授)「近世大坂における都市法と社会」
八木 滋氏(大阪歴史博物館学芸員)「科研の総括と今後の研究方向」
今回は、平成17年度～平成20年度・科学研究費補助金・基盤研究(B)『近世巨大都市大坂の形成と変容に関する基盤的研究—法と現実、中心と周縁の視点から』(研究代表者：文学研究科教授塚田孝)を終えるにあたり、研究論点に関する報告、および科研全体の総括と今後の活動についての報告を行いました。

まず塚田孝は、近世大坂の都市法を分析する際の視角として、近世社会を「多様な社会諸集団が重層・複合し、公権を重層的に分有」するとともに、公権を分有する諸集団がそれぞれ自律的な法を持っていたと捉え、これにより、①政治空間全体を覆う公儀法度、②自律的な集団が集団内部を規律する法、③そうした集団相互間の関係を規定する法という視野が大事だとしました。その際、「法と社会」という視角、すなわち、法史料を検討するにあたって「法の形式」と「法の内容」の両面から社会の実態に迫ることを目指しながら、都市大坂を例に都市法を概観し、今後の研究の方向性を探ろうとしました。具体的には、①町奉行所から出される町触や仲間位置など都市大坂を覆う公儀法度、②町法(町式目)など社会集団を内的に規律する法、③異なる株仲間間の申合せなど集団間の関係を規定する法、について取り上げました。

報告の後、①法史料を用い、法の外部に存在する集団・存在への迫り方、②法と社会の実態のズレや相互関係性、③仲間法と町奉行からの法の相互規定性、④訴訟の裁定により仲間位置が変化していく可能性、などが議論されました。

続いて八木滋氏が、科研の総括として、研究開始の背景、研究の目的、研究の方法(実施内容)、研究成果の概略を提示するとともに、今後の研究方向について、十七世紀の解明が特に必要ではないかという論点と、近世大坂研究会の予定として今夏のシンポジウムの構想などが提示されました。

Toyosaki Plaza

豊崎プラザ

■2008年度耐震補強および改修工事の成果報告

日程：2008年11月～2009年3月

対象：豊崎プラザ内長屋2棟8軒

年が明け、各長屋の基礎工事・耐震補強工事を行いました。耐震工事では、昨年度の豊崎の工事が先進的実用事例としての役割を担った耐震装置「リブフレーム」を再び用いました。居住者のいる長屋では居住空間に影響しないよう押し入れ内に設置し、空家と店舗には多数の装置を設置することで、建物全体で耐震性を確保しました。また、各長屋で「荒壁パネル」を積極的に採用し、短い工期で耐震性を持つ土壁を施工することができました。工事の過程では、天井裏から立派な梁を、また正面外壁を覆っていた合板を剥がすと建設当初の意匠などが発見されました。

工事への学生の参画

卒業設計で豊崎の長屋の設計に各々1軒を担当した4回生は、設計により決定した詳細な計画を基に現場で職人さんと掛け合い、図面上の設計と現場の繋がりを実地で経験することができました。また、木部ペンキの剥離・洗い・塗装や土壁の落とし作業など、修復には手間のかかる作業が多く、これを学生が実働隊として担いました。

■居住環境学科3回生設計演習講評会

日時：2009年2月2日(月)13:30～16:30

豊崎プラザを計画地として設定した設計演習に、当主と、この家に嫁ぐまで暮らしておられた妹さんも参加されました。計画案は、高齢者住宅・伝統技術職人の居住兼仕事場・宿泊施設・伝統文化を学ぶ施設・美術館・保育園・図書館兼観光施設といった提案で、既存の主屋・長屋の持つ伝統性や集合施設としての良さをできる限り活かしたうえで、新たな可能性を引き出そうと取り組んだ様子がかがえました。設計途中には、現在耐震補強の工事が進行しているためにむき出しになっている長屋の構造を見学することで、重要な構造物や細部の収まりを確認し、実測を行えたことが設計上の実感にも大いに役立ちました。当家で長い時間を過ごされたお2人は、学生たちの夢のある提案に驚きつつ、実現できればと感激されていました。

Izumi Plaza

和泉プラザ

■2008年度和泉市合同調査報告書作成(『市大日本史』12号、2009年5月刊行予定)

「和泉市池田下町の四町会(中村・久保出・願成・山深)における歴史的総合調査」

和泉プラザでは、昨年の和泉市合同調査(日時：2008年8月2日～4日、調査対象地：和泉市池田下町中村・久保出・願成・山深、参加者：計67名)の報告書を作成しました。

成果のとりまとめは、実行委員長齊藤紘子(G-COE研究員)、和泉プラザ研究員久角健二、班長4名を中心とする実行委員会で進め、地元町会にも報告書の内容を確認してもらいました。昨年は一昨年の泉財町会に引き続いて同じ池田下町を対象とし、さらに四町会を同時に調査するという例年とは異なる合同調査でしたが、従来通りの各町会に即した「地域の歴史的総合調査」という方法をとることによって、同じ池田下町の集落としての姿を垣間見ることができました。このほか、2008年度後期の日本史講読Ⅲ(担当：塚田孝)の授業では、先行研究にも学びながら、合同調査の際に新たに確認された史料を関連史料と組み合わせることで精読しました。その成果もあわせて合同調査の報告書としています(「泉州池田下村山深の座と寺について一文政期の二つの争論から一」)。

Ogimachi Plaza

扇町プラザ

■都市研究プラザ・フォーラム&アートNPOリンク井戸端会議 共同開催「コミュニティアートと都市政策」

日時：2009年1月13日(火) 19:00～21:00

会場：船場アートカフェ

ゲスト：フランソワ・マタラッソ(François Matarasso)氏(リサーチャー/コンサルタント/作家/アート・カウンシル・イングランド・イーストミッドランド評議委員長)

主催：NPO法人アートNPOリンク、都市研究プラザ(扇町プラザ)、大阪市立大学大学院創造都市研究科「都市文化政策研究会」

助成：大和日英基金、グレイトブリテンササカワ財団

協力：ブリティッシュ・カウンシル、大阪でアーツカウンシルをつくる会

企画協力：ミューズ・カンパニー

英国の文化政策研究者であるフランソワ・マタラッソ氏を招き、英国におけるコミュニティアートの取り組みと、地域調査の手法、並びに政策立案に向けたアドボカシー活動の手法などについて話を聞きました。

英国におけるコミュニティアートの取り組みは、もはや地方政府や美術館などにとって当たり前の政策である一方で、それに関わるアーティストや関係者の労働条件は確立されていないとのこと。また、一口に「調査」や「評価」と言っても、そこにはアプローチや目的、あるいはその作業主体によって、いくつかの種類に分けることができ、それらの調査の中には、アドボカシーに活かすことのできないものもあるとのシビアな意見を聞く事ができました。さらに、アドボカシーと調査は、本来的には別の作業であり、アドボカシーを目的とした調査はかえって信頼性が損なわれる、ということも強調されていました。

なお、今回、研究機関と現場で活動する人々との連携で開催できたことにも、大きな意義がありました。

Francois Matarasso, who does research on British cultural policies, was invited to the URP and spoke about involvement in community art and local survey methods, together with methods of advocacy activity aimed at proposing policy changes. Even in the simple words 'survey' and 'assessment', one can distinguish many different types based on approaches and goals, or who is running the project. Among these different types of surveys, some are useful for advocacy and some are not; we were able to hear his sharp criticisms. It was also deeply significant that such a forum was held jointly by research institutions and people who are active on the ground.

The 2nd Unit 第2ユニット

Cultural Creativity 文化創造

■第16回アートマネジメント研究会

日時:2009年1月7日(水) 15:00~17:00

第16回研究会では、3月24日(火)に開催する「第3回アジア・アートマネジメント会議」に関するミーティングをおこないました。同会議は、アジア各国のキュレーターやアートディレクターを招聘し、各地域のアートシーンやアートマネジメントの現状と課題について討論する場として、2007年にスタートしました。ミーティングを通じて、第3回となる今回はBinding Local Voicesというテーマでアートマネジメントとコミュニティとの関係を実践の現場に即して議論していくことが決まりました。

■第17回アートマネジメント研究会

日時:2009年1月28日(水) 13:00~15:00

講師:タン・スイベン Tan Sooi Beng教授 (Universiti Sains Malaysia)

テーマ:Sustaining the Living Multicultural Heritage of Penang

Universiti Sains MalaysiaのTan Sooi Beng教授を招き、ペナンで教授が実施されている芸術教育プログラムChildren of the Cityについてレクチャーを受けました。ペナン島の中心地であるジョージタウンは、中国系・インド系・マレー系民族やタイコミュニティなどが密集する多民族都市として知られています。Children of the Cityはこのよう

な多民族社会に暮らす子どもたちを対象とし、ワークショップやフィールドワークを通じて自分たちの伝統芸術を学びなおすとともに、異文化を知ることによって相互理解をうながすプログラムです。レクチャーと質疑応答によって、コミュニティ・ベースの芸術文化教育プログラムが多文化共生に向けて人々をエンパワーしてきたことがわかりました。

The Cultural Creativity Unit held an Art Management Research Group meeting. Arrangements were made for the 'Meeting of Asian Art Management 3' which this research group plans and conducts. Additionally, Professor Dr. Tan Sooi Beng of the Universiti Sains Malaysia gave a lecture, deepening our knowledge and discussions of art management in Asia.

SENBA ART CAFE

船場アートカフェ

■第6回アート&アクセス研究会

日時:2009年1月27日(火) 19:00~21:00

会場:船場アートカフェ7F

講師:山本真弓氏(河内長野市立長野中学校教諭:音楽)

主催:都市研究プラザ、船場アートカフェ

協力:財団法人たんぼの家、NPO法人こえとことばとこころの部屋

サントリー文化財団の助成を得て始まった同研究会は大阪市立大学大学院文学研究科教授であり船場アートカフェ・プロデューサーでもある中川眞を代表とし、一貫したテーマとして「現代社会におけるアートのアクセシビリティ・マイノリティに向き合う社会の構築に向けて」を掲げています。毎回多彩なゲスト・スピーカーを迎えて実践報告等を聞き、そこから「インクルージョンとは何か」「マイノリティとマジョリティの関係」等について、少し変わった角度からの考察を重ねています。今回はゲスト・スピーカーに中学校の音楽教諭である山本真弓氏を迎え、「音楽教育と地域のリンク」についてVTR等を交えた話を聞きました。

山本氏は10年以上、地域の郷土芸能を音楽の授業に取り込む試みを続けています。氏の勤務地域である河内には、郷土芸能として地車囃子(だんじりばやし)があります。一口に地車囃子といっても、地域によって独自性があり、多様化されてきています。郷土芸能が時として過去のものとして廃れていく中、山本氏は地域に息づく現在進行形の芸能として地車囃子を扱うことで、児童生徒の生きる意欲や学習意欲を引き出そうとしてきました。彼らの生活において身近な存在である地車囃子を取り上げた氏の試みは、グループ毎のお囃子づくり、地車が曳行するルートの作成等、共同作業を多く含むプログラムを通して音楽的な感受や表現の工夫、社会性を促す成果を挙げています。

また郷土芸能の伝承と創造を共に追体験することで、従来の地域住民である生徒と、新興住宅の増加に伴い他の地域から転入してきた生徒、(時にはその両者の家族間)の相互理解を高め、同じ郷土の一員としての連帯感を生む等、山本氏の取り組みは、現在では学校と地域社会をつなげる役割も果しつつあります。とはいえ、保護者や学校との間に学習活動の指導を巡って必ずしも理解が得られるとは限らないことや、実際地元の地車囃子に参加した生徒が生活態度を崩す

ケースがあること等、浮き彫りとなってきた問題についても話は及びました。

山本氏の報告を受け、その後質疑応答が続きましたが、実際の現場から述べられる教育環境、学校を取巻く状況等は非常に興味深く、出席者を交え積極的なディスカッションが行われました。出席者全員、学校も社会の縮図の一つであり、経済的、社会的格差が教育の場にも重大な影響を及ぼしていることを再認識するとともに、伝統芸能(あるいはアート)を架け橋に、先生と生徒、生徒同士、学校と地域の新たな関係性を模索する氏の活動は、同研究会の取り組みに新たな可能性を提示するものとなりました。

■「monthly art cafe」

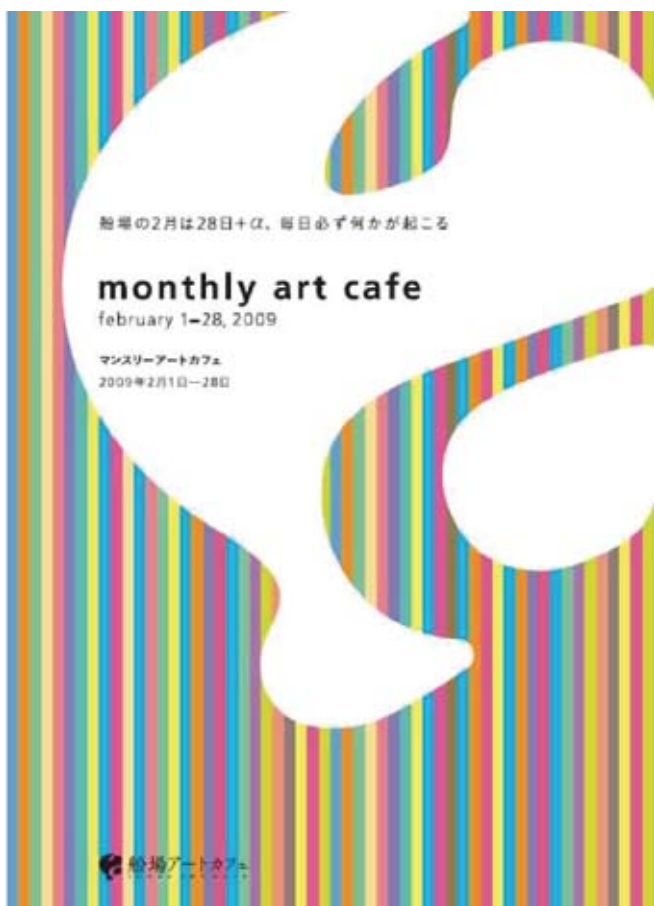
日程：2009年1月23日(金)、2月1日(日)～2月28日(土)

会場：船場アートカフェ

主催：都市研究プラザ、船場アートカフェ、イベント学会(1月23日開催「monthly art cafe」プレイベント「イベントを学ぶ」のみ)

船場アートカフェ初の試みとして、2月の1ヶ月間、連日船場アートカフェにてイベントを開催しました。船場アートカフェのメンバー及びレジデンシャル・アーティストであるカミス(ダンスユニット)、スリヤサンキート(タイ古典音楽合奏団)をナビゲーターに、知とアートのショーケースとしてワークショップ、レクチャー等多彩な日替わりメニューを展開しました。

また1月23日には船場アートカフェ・プロデューサーである橋爪伸也をナビゲーターに「monthly art cafe」プレイベント「イベントを学ぶ」を開催しました。



■ひがしなり あしたの地図よ☆

日時：第1日：2009年2月14日(土)13:30～17:00

第2日：2月21日(土)14:00～17:00

第3日：2月28日(土)13:00～17:00

会場：ひがしなり市民協働ステーション「ふれ愛パンジー」

主催：東成区役所

共催：都市研究プラザ、船場アートカフェ

講師：第1日 東成歴史懇話会(「歴史散策」)、

花村周寛氏(「ガリバースコープ」)

本間直樹氏(「ひがしなりムービーをとろう!」)

協力：久保田テツ氏他

第2日 上田假奈代(詩人・NPO法人こえとことばとこころの部屋代表)

森 洋久(文学研究科准教授)

第3日 上田假奈代

森 洋久

1日目は3人のプランナーが用意したコース(①「歴史散策」②「ガリバースコープ」③「ひがしなりムービーをとろう!」)から1つを選び、実際東成のまちを散策、まちの新たな表情を見つめる時間を参加者の方々と共有しました。「歴史散策」は区内の歴史愛好家と共に、東成に残る史跡を辿るもので、かつて「おかげ参り(伊勢参り)」の「暗越奈良街道」としてにぎわったこの地の古い歴史や文化を再発見する内容となりました。また「ガリバースコープ」では、小さな人形をアスファルトや草むらにおいてみることで、リリパットの国に迷い込んだガリバーのように、まちの風景をズームアップして楽しんでもらいました。「ひがしなりムービーをとろう!」では、家庭用のビデオカメラを用いて、東成のまちを題材に、「超ショートムービー」を作成しました。参加者の方々にシナリオを考えてもらった後、実際にまちに出てロケ撮影を行いました。

2日目は、大きな紙に、東成の地図を描くワークショップを行いました。正確な地形を描く地図ではなく、参加者の方々に思い出の場所、好きな場所、暮らす場所等々自由に書き込んでもらうことで、東成への想いを映した、世界に1つの地図が出来上がりました。

3日目の2月28日(土)には2日目に作成した地図に、メッセージ、詩、感じた言葉をのせていくワークショップを行いました。「ひがしなり あしたの地図よ☆」の全3回を通して深まった東成への想いが、描かれた地図と詠まれた言葉のコラボレーションで無限の広がりを見せました。

またワークショップ後、1日目の講師陣も参加するパネルディスカッションが開催され、出来上がった地図を鑑賞しながら、いつものまちにコペルニクスの転回をもたらす今回のイベントについて振り返りました。

The 3rd Unit 第3ユニット

Social Inclusion 社会包摂

社会包摂ユニットでは、定例研究会に加えて、「セーフティネット不全を克服するハウジング供給のアクティブな試み—ホームレス・ジョブレスの危機への対応」と題した連続ワークショップを行っております。「ハウスレス/ホームレス/不安的居住」をキーワードに、これらの状況を打開する取り組みを実践されている方々を招き、刻々と変化する現場の状況について話を聞きました。2009年1月-2月にかけて3回開催し、第1回については定例研究会と、第2回については釜学研究会との合同開催としました。詳細については、次号で報告します。

1. ユニット定例研究会

■社会包摂ユニット 第10回研究会 兼 連続ワークショップ「セーフティネット不全を克服するハウジング供給のアクティブな試み—ホームレス・ジョブレスの危機への対応」第1回) 掲掲

■社会包摂ユニット 第11回研究会

日時：2009年2月29日（木）18：30～20：30

場所：高原記念館研究棟 1階

発表者：白波瀬達也

テーマ：「Faith Related NPOによる野宿者支援—ソーシャル・キャピタルの形成過程に着目して—」

第11回研究会では、白波瀬達也による研究発表を行いました。日本の野宿者支援を行っているNPO法人の中には、特定の宗教と結びつきの強いものが多くを占めており、野宿者支援の重要なアクターとなっています。発表者は、NPO法人プロミスキーパーズ(沖縄)、NPO法人北九州ホームレス支援機構という、キリスト教信仰を軸としたFaith-Related NPOを事例として取り上げ、宗教を背景とした野宿者支援の効用について発表しました。

2. 【連続フォーラム】セーフティネット不全を克服するハウジング供給のアクティブな試み—ホームレス/ジョブレスの危機への対応

■第1回（社会包摂ユニット第10回研究会と合同）

「サポーターハウス アプリシエイトの実践」

日時：2009年1月29日（木）18：45～20：30

場所：西成プラザ

発表者：山田和英氏（アプリシエイトグループ代表）

■第2回（釜学研究会と合同）

「釜ヶ崎におけるサポーターハウスの取り組み—住み慣れたまちで自分らしい生活を—」

日時：2009年2月17日（火）18：30～20：30

場所：西成市民館講堂

発題者：宮地泰子氏（NPO法人サポーターハウス連絡協議会代表）

■第3回

「首都圏における無料低額宿泊所事業の現状と課題」

日時：2009年2月28日（土）14：00～18：00

場所：西成プラザ

発題者：小川卓也、菱田貴大氏（NPO法人エスエスエス理事）

3. 全国ホームレス支援調査

■尼崎市ホームレス概況調査

日時：1月22日（木）～23日（金）

委託者：大阪府立大学福祉研究機構

毎年1月時点で行われる全国一斉のホームレス概数調査を、今年も大阪府立大学の中山徹教授の指揮により、尼崎市で行いました。夜間調査と昼間調査からなり、総勢40名の調査員が実施した結果、2008年1月：昼間217人、夜間30人、合計247人
2009年1月：昼間179人、夜間17人、合計196人でした。

昨年に比べ2割強の減少で、ピーク時2003年1月の360人からすると半減しています。公園閉鎖、河川敷工事、生活保護、病気、死亡、移動などが減少要因と考えられます。



■富山福祉アパート見学会

日時：2009年1月24日（土）

来訪先：「縁側ネット」第2ハウス

水内俊雄、全泓奎、黒木宏一、研究協力者の川浪剛氏の4人が、富山市のホームレス支援団体「縁側ネット」が運営する福祉アパートの見学を行いました。当ユニットが連続ワークショップのキーワードにも掲げた「ハウスレス/ホームレス/不安的居住状況」に対する取り組みの最前線です。

4. こりあんコミュニティ研究会の発足

こりあんコミュニティ研究会は、都市研究プラザ教員の全、研究員の宮下、本岡らが中心となって立ち上げた研究会で、都市プラザ教員の水内、特別研究員の中山(大阪府立大学)も運営に関わっており、在日コリアンの問題に関心を持つ研究者や学生、市民など様々な所属のメンバーで構成されています。このため、文化人類学、地理学、社会学、建築学、都市計画、居住福祉、社会福祉などアカデミックな視点からの関心を持つ会員だけではなく、実際に在日コリアン居住地区の支援に関わっている会員や在野の立場で在日コリアンに関する定例研究会を主催している会員もおり、学際的かつインターフェイス的性格を持った研究会です。

活動については、①月1回程度の研究会もしくはフィールドワーク、②共同調査、③メーリングリストを通じた情報の共有が大きな軸となります。①については、会員もしくは外部から招いた「在日コリアン」に関する研究や実践を行っている方による発表や当該地域の状況に詳しい方の案内による現地のフィールドワークを行い、様々な地域の状況についての情報や知識の共有、交換、研究に際しての方法論の学習などを目的としています。②については、当面は大阪市内の大川沿い河川敷占有区画について、地域の形成史、宗教儀礼の在り方、居住環境などの観点から共同調査を行っていく予定

であり、すでに予備的な調査を開始しています。また、京都府宇治市のウトロ地区で企画されている調査にも研究会として関わって行く予定です。本年(2009年)8月には和歌山県内の在日コリアン集住地区の調査を行うことも予定しています。将来的には、日本国内全域や海外のコリアンコミュニティ(中国、香港、カザフスタン、ロサンゼルスなど)の調査を行うことも視野に入れていきます。

当研究会に関わる情報の発信については、年4回のニューズレターの発行と年1回の論文集(『コリアンコミュニティ研究』)を刊行する予定です。なお、当研究会の方向性として、将来的にはコリアンコミュニティだけではなく、他のエスニシティ集団やそれに類する集団(沖縄出身者や奄美出身者など)に関する調査・研究を行うことも視野に入れていきます。

5. G-COE講演会「韓国経済社会地理学の最先端」

2009年2月16日(月)、14時30分から18時まで、表記の講演会を大阪市立大学・杉本町キャンパスの高原記念館において開催しました。今回の講演会は、大阪市立大学都市研究プラザ・グローバルCOEプログラムによる後援と大阪大学文学研究科人文地理学教室・堤研究室による協力のもとに企画・運営されたものであり、ソウル国立大学の先進気鋭の経済地理学者二名による講演が行われました。

朴倍均(Park, Bae-Gyoon)氏は“Uneven Development, Inter-scalar Tensions, and the Politics of Decentralization in South Korea”(「韓国における不均等発展、スケール間テンションと脱中心のポリティクス」)のタイトルで英語による講演を行い、国家規模で貫徹されようとするポリティクスとそれに対抗するローカルな空間性とのせめぎあいの議論が展開されました。

つづいて金容倉(Kim, Yong-Chang)氏が“Rethinking the 'Public Use' Perspectives on Land Property Right and Urban Development in the Age of Neoliberalism”(「新自由主義時代における土地所有権と土地公概念・都市開発に関する視点の再考」)というタイトルでハングル語による講演(通訳付き)を行いました。この発表では、土地の私的所有権・財産権と公的な観点から見た場合の土地(土地「公」概念)との関係の中で、公益性の吟味が必要であることが強調されました。

Nishinari Plaza

西成プラザ

■西成健康実態調査(西成健康調査研究会)

主催：西成区北西部まちづくり委員会

後援：西成住宅改良地区まちづくり協議会

■西成健康実態調査の成功に向けた拡大代表者会議

日時：2009年1月14日(水) 19:00 - 20:30

場所：大阪市立西成人権文化センター

参加者数：約50名

地域の住民諸団体やまちづくり団体、また教育機関(学校・保育所及びPTA)を中心とする住民の方々に集まってもらい、調査票の説明及び調査計画の最終確認を行うとともに、調査に向けて意識を高めました。

また、1月27日(火)、2月12日(木)には、大阪市立大学や大

阪府立大学をはじめとする学生調査員や地元調査員を対象に研修会を実施しました。

4月下旬に調査完了を予定しており、3月末現在の回収票数は2048票でした。

■楽塾08年度修了記念旅行

主催：(株)ナイス 非営利部門「くらし応援室」

協賛：西成プラザ

日時：2009年2月14日(土)・15日(日)

参加者数：23名

「くらし応援室」が主催する学びなおしの場、共感・交流・表現の場「楽塾」のプレ開校もスタートして6ヶ月が経過しました。今回は、プレ開校修了記念旅行として、今年度主に西成プラザが関わってきた和歌山県新宮市を中心に「熊野三山巡り」を行いました。

調査でお世話になっている新宮市職員の方々にもガイドしてもらい、熊野本宮大社、那智大社、熊野速玉大社、神倉神社をはじめとする熊野古道の要所を巡りました。また、新宮支部女性部の皆さんにも歓待していただく等、昨年11月に続き、西成と新宮との親睦を深める2日間でした。

今後も西成プラザでは、楽塾の運営に積極的に関わってだけでなく、今回の新宮市との交流のように新たなネットワークを構築、拡大していくことに努めていきます。

Nagara Plaza

長柄プラザ

長柄プラザの研究フィールドである更生施設大淀寮は、早くから、その活動を地域に展開することにより地域の支持を得ながら地域活動の中心にもなるという、更生施設と地域が共存する先進事例です。

■長柄プラザ地域貢献事業「2009芋豊作プロジェクト」

そうした地域活動の一つである老人会の芋掘り大会は、老人会が世話をする芋畑に地域の二つの幼稚園児を招待する毎年秋の恒例行事です。ところが、最近是不作が続き何度も芋掘りの断念を考えたそうですが、「年長組しか招待せんから、来年は芋掘りができると思っている年少組の気持ちを考えると、やめるにやめられん」と、大変悩んでいました。

不作となってからは、老人会から大淀寮に要請があり、昨秋は長柄プラザのメンバーも協力して能勢の畑に芋をトラック一杯買いに行き(もちろん畑から掘り起こすのも買い手)、これを老人会の畑に植えて芋掘り大会を開催しました。芋を掘り出した幼稚園児たちはもちろん、はしゃぐ子供たちを見ている老人会の方々も嬉しそうでした。

その笑顔に答えるため、長柄プラザでは、もう一度畑で芋を実らすための「2009芋豊作プロジェクト」を企画しました。しかし、私たちも農作物の専門知識を全く持っていないので、住吉公園副所長の篠原健吉氏にお手伝いをお願いしました。現在、プロジェクトは、秋の豊作を目指して準備をしています。

■北区福祉ふれあいフェスタ

社会福祉協議会、社会福祉施設連絡会が後援する「北区福祉ふれ

あいフェスタ」が北区区民センター及びセンター前広場で開催されました。長柄プラザのメンバーが参加する大淀祭は、バザーに植木苗を出品するとともに、ゲームコーナーで「一円玉落としゲーム」を行いました。参加費無料のゲームは盛況で長蛇の列となる場面もありました。

■住之江スーパー銭湯へ

地域と共存する大淀祭は、寮のOBに対しても支援を行うOB会

が組織されています。また逆にOBが寮の活動を支援するというOB会が組織されています。そんなOB会員であるAさんが、「どこか出かけたいな」と言ったのがきっかけで、長柄プラザのメンバーがレクレーションを企画しました。呼吸器の病気があり酸素ボンベを常時離せない高齢のAさんは、この3年間北区から出たことがなかったとのことで、「生きていてよかった」と言われるほどの大旅行でした。

Information

お知らせ

■イベント予定

月	日	イベント名	場 所	開 催 者
5月	2日	「2009芋豊作プロジェクト」苗植え付け作業	北区長柄の畑	長柄プラザ
5月	7～9日	香港・上海・ソウルサブセンター合同ワークショップ「再開発と住民」	香港浸会大学	第3ユニット
5月	20日	第3回 こりあんコミュニティ研究会	西成プラザ	第3ユニット
5月	22日	第14回 四天王寺と都市大坂研究会	天王寺区民センター	第1ユニット
5月	29日	第3ユニット 第13回研究会	高原記念館	第3ユニット
5月～9月		地域のためのアートマネジメント講座（全10回）	船場アートカフェ、他	第1,2ユニット
6月	6日	URP/G-COE International Colloquium “The Spatialities of Contentious Politics”	キャンパスポート大阪	第3,4ユニット
6月	9日	第4回【連続ワークショップ】セーフティネット不全を克服するハウジング供給のアクティブな試みーホームレス・ジョブレスの危機への対応	西成市民館	第3ユニット
6月	10日	ワークショップ 比較研究 日米地域福祉計画	同志社大学	第3ユニット
6月	12日	第15回 四天王寺と都市大坂研究会	天王寺区民センター	第1ユニット
6月	15日	フォーラム「グローバル経済と芸術ーフランスの文化政策を通じてみる、日本の芸術文化環境～」	キャンパスポート大阪	第1,2ユニット
6月	20日	第4回 こりあんコミュニティ研究会	桜ノ宮竜王宮	第3ユニット
6月	25日	第3ユニット 第14回研究会	高原記念館	第3ユニット
6月	27～28日	シンポジウム ホームレス女性の支援とその課題（仮）	富山県民共生センター	第3ユニット
7月	10日	第16回 四天王寺と都市大坂研究会	天王寺区民センター	第1ユニット

G-COE 特別研究員（若手）募集（平成21年8月募集分） 募集期間：平成21年8月初旬、口頭試問は8月下旬を予定
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■次号発行予定

2009年8月（季刊）

大阪市立大学 都市研究プラザ 〒558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138
 所 長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野浩 富田常雄
 ユニット長 1 佐々木雅幸 2 中川 眞 3 水内俊雄 4 岡野 浩
 編集委員会 コーディネータ 蟲明眞一郎、佐藤由美、角知子、西田貴子
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/index.html>